

2024年2月の総評に代えて 高橋修宏

本棚の隙間を埋める春の風 (まちりこ 埼玉県)

「本棚の隙間」を吹きぬけるではなく、「埋める」の一語がポイントか。あたかも「春の風」そのものが、一冊の（あるいは数冊の）本のように捉えられている。

多分すべて (源楓香 東京都)

違法アップロードなんだ
君も、君と見たあの夜桜も

何より、「違法アップロード」の一語が異和感をもたらす。「君」も「夜桜」も、ヴァーチャルだったのか。現代に対する不穏な予感や批評さえ含んだ一作か。

草青むコロポックルの置手紙 (田崎森太 東京都)

「コロポックル」とは、古来からアイヌの伝承に登場する^{フキ}蕨の葉に隠れるほどの小人。「置手紙」という言葉が、そんな小人に、さりげなく実在感を与えている。

蝶の昼さりさりさりと砂時計 (吉沢美香 宮城県)

「さりさりさり」という不思議な響きは、砂時計が落ちてゆく様子を捉えた擬音か。「蝶の昼」という長閑な時間の中で、ただ虚無的に乾いた砂だけが落ちてゆく。

刺さってなんかいない (こはくいろ 大阪府)

こんなにも狂いなく
つめたいままだから

何が「刺さって」いないのか、その実体が明かされないままに、二、三行で作中主体の想いだけが吐露されてゆく。もしや刺さるものとは、言葉という凶器なのかもしれない。

テキトーにインコの声を
真似したらそのまま
会話が続けてしまう
(貴田雄介 熊本県)

「声」を媒介として、インコという鳥と人という存在が混じり合い、ときに入れかわるような作品。どこかノンシャランとしながら、ユーモラスな不条理感も漂う。

世界史の一問先に広がった
戦場をまだ僕は知らない
(うたた 岡山県)

「世界史」という教科を踏まえながらの、現代の世界情勢に対するアイロニーか。「僕は知らない」と記すことも、個という存在からのニヒルなプロテスト。

読点が羽毛のように散らばって
食い千切られた句点を撫でる
(常田瑛子 山口県)

日本語でありながら、容易に読めない文章を前にしたとき、「読点」や「句点」だけが浮遊し、現前するのかもしれない。それにしても、この「読点」や「句点」の生々しさは只事ではない。何かの事後のような、暴力的な気配さえはらんでいる。

目をとじる
あけたら雨は止んでいて、
切られた髪にも重みがあった
(藤井柊太 神奈川県)

おそらく、美容室の情景なのだろう。「目」をとじる、「髪」を切られるという身体的な変化が、雨が止んだという外景の変化と照応しているようだ。ささやかな時間それ自体が、巧みに描かれている。

錆びて
淋しい
残雪の
三輪車
(加那屋こあ 東京都)

サの頭韻を活用した多行形式の俳句のような一作。三行目、濁音の「残雪」が、作品内にささやかな屈折をつくり出す。

音の無いトムとジェリーが
繰り返し流れる待合室で眠った
(狛犬吠 岡山県)

すでに、どこかで経験したような白昼夢のようなイメージをまとった作品。「音の無い」、そして「繰り返し流れる」ことによって、催眠的とも呼べる世界に誘われるようだ。

ルンバどこいくのそっちは冬の海
(斎藤よひら 京都府)

「ルンバ」というダンスの名を付けられた全自動掃除機。そんな「ルンバ」への呼びかけが、ユーモラスでありながら、どこか優しくも切ない。作者にとって、すでに「ルンバ」は小さな子ども、あるいは愛しいペットのような存在なのかもしれない。